

不在の現在

激しい雨だ……。降りしきるこんな雨の音を聞いていると私の生も無駄ではないのだと思う。昨日の苦痛や一昨日の怒りや三日前の不満や言い争いや四日前の不一致など、これら私に私を意識させ私を他者から孤立させ私の熱心と正義感と人間愛と自尊心と勇氣と誠実さと謙虚さとその他この種の諸々の私の力を証するものどもを、この雨がまるでケガレや罪や悪徳でも洗い流すかのように流し去る。いつもなら、疲れ切ったこの身を休ませ夜の闇の底に横たえろと、私は重い。だが今夜、雨の降りしきる今夜は、……この身の重さを感じながらこの雨は梅雨明けの嵐だらうかなどと考えている間にも、その考える私を雨の音が奪い去ってゆく。水が私をおおい私は水のなかに浮かぶようだ。私は私の重さから解き放たれ私自身の内側でゆっくりと浮揚して雨の音のなかをただよいながらやつと所を得たような安らぎを覚えはじめる。私は今、私自身が水のなかに流出し溶けてゆく思いだ。私の心臓の鼓動、私の血流、私の息など、私の生を証する私の植物性や、私の聴覚、私の触覚、私の嗅覚など、やはり私の生を証する私の動物性、さらに、ひどく疲れたこの身にもまだかすかに残る私の思考やことばといった、やはり私の生を証する私の精神性が、今夜の雨と不思議なくらいに調和する。

この不思議を語ることができるだろうか……。私の心臓の鼓動は今降りしきるこの雨の音。私の体をめぐる血は今地表を流れ大地にしみこむ雨の水。私の息は、無数の雨滴に貫通された大気のおののき。私の耳は、今ここに存在する現実のかなでる音を受容する果てしない夜の空間。私の皮膚は、この身とこの身の彼方が触れ合い浸透し合う目眩めく渦動のゾーン。そして私の思考とことば……激しく降りそそぐ今夜の雨と不思議と調和するこの思考とことば……これは何だろう。……おそらく……現実そのもの……。私の思考とことばは、おのれ自身へと折れ曲がった現実、おのれ自身と向かい合う現実、あるいは、おのれ自身へと折れ曲がる現実のその折り目、おのれの姿に見入る現実が手にもつ鏡、である。いや、あるいはひよつとすると、自己へと折れ曲がり自己と向き合おうとする衝動、現実を貫流し現実を現実たらしめる現実に宿る志向性、にすぎないのかもしれない。いずれにせよ、それは、この私の身には、もつとも純粋な歓びともつとも耐えがたい苦痛との同じ一つの源泉である。……私の生を証するものたちが、このように、降る雨や流れる水やそよぐ大気や闇をはらむ空洞といった存在とのつながりを回復できるなら、私の生も無駄ではないのだろう。とりわけ私の思考やこと

北岡 崇

だが、それ自身、現実となつて、あるいは、現実そのものにほかならない知の光をその現実に得させる鏡となつて、その鏡が、私の心臓の鼓動や血流や息や聴覚や触覚など私の生を証するものたちをすべて雨の降りしきるこの夜のものと語る今、私の生は決して無駄ではない。

それにしても、雨の降りしきる夜の空間にみなぎりあふれる存在のことばは凄絶だ。あふれるそのことばは私を圧倒し打ち倒し世界を飲み込む。その残酷さに立ち会い、その残酷な仕打ちにこの身をさらし、なすすべもなく立ちつくしながら、それはよいことだと、私は、存在のことばに信頼を寄せる。人間がなぜか何ものかに執着してつくりあげたさまざまなブンカ・ブンメイがそれぞれその断片性と偏狭さを暴かれその急所を突かれこの雨の音のなかに飲み込まれてゆく。天から大地へと滝のように落下する（そして大地にあるすべてのものに激しく打ちかかる）大河と、その河の水を集め大地を洗う濁流となつて大地を挟り穿ち拉し去る大河と、これら二つの大河が人間のブンカ・ブンメイを壊滅させる。まず水路と橋と堤防を毀し、ついで田畑と公園と街路を水没させ、さらに工場とデパートと銀行を飲み込む。紙幣も書物も新聞も六法全書も消防署も、国境も国々も衰弱した神々も水没する。人間のブンカ・ブンメイは、力つきた戦艦のようにゆつくりと傾き、崩壊し、激流のなかに陥没する。そして最後に、人間のブンカ・ブンメイの骨格を成してきたもの、つまり人間のことが崩れはじめる。さまざまな形態のブンカ・ブンメイに柔軟に適合しつつそれぞれの形態の骨格を成し永く歴史を生きのびてきた歳を経た蛇のような（ノアの時代のあの大洪水の時も生き残った）人間のことがもちまへのゆらぎのうちに吸収しきれない存在のことばに射し透されて崩れはじめるのだ。人

間のことばは、アとかオとかウとかの音に解体し、地表をおおう海を漂流する。がとかをとかにとかの文字が逆さになつたり裏返しになつたりして木切れのように漂流するのを眺めながら、それはよいことだと、私は、なおも存在のことばに信頼を寄せる。

ことばを話せなかつた幼い私に

父と母は優しくかつた……ことばなんか

読めなくても書けなくても、

話せなくても聞けなくても、

いいんだよ……いいのよ……。

ことばを解さない私に

声なき声が語りかけた。

私は、人類史とほぼ等しい過去をもつ古いことばの呪縛を解かれ、自由な遊動を開始する。今ここに遊動する私は、空を飛ぶカモメであり、水中を遊泳するイルカである。一片のボードに身を託し波の背に乗る少年であり、ラフティングに歓声をあげる少女である。また、その他軽やかさと力強さをあわせもつすべての生きものである。動物植物や神の子たちだけが味わうことのできる幸福がさし迫る。音楽が雑音と化して雨の音が楽音と化した今夜、私は、無数の名も無い雨滴の一つとなつて、宇宙に鳴りひびく存在の交響楽のなかに私の居場所を探りあてることができたということなのか。それなら私は今、苦しく味気なかつたこと、つまり人間であるということをやめて、ただ在るということの幸福に酔い痴れることをゆるされていいのであろうか……。

人間であること、大勢の人間たちが共生するあのぎこちない社会

にあつて生きることは、いつも苦しく味気ないことであつた。そこではコミュニケーションということがくりかえし話題にのぼるが、何一つ十分にコミュニケーションされたことがない。コミュニケーションという話題についてさえ、何一つ。大勢の人間がいるが孤独でない者は誰もいない。だが、各人が各人各様の孤独を享受して生きるというのではない。社会では、人間は全員そろつて、ほぼ同じ顔をしてゐるのだ。あそこでも種々さまざまな存在たちがおのれのことを語り出しているが、そのことばはすべて聞きのがされている。現実が知への道を開き、知を語り聞かせようとしても、そのことばは、その声は、書物や新聞や法令や科学や、騒々しい弁舌やあくびを促す説教や言わずもがなの講釈・解説や、パチンコや小銭のジャラジャラいう音で、かき消されてしまう。誰も聞かないのだ。誰も理解できないのだ。あそこでも人間はみな何かしゃべっているが、口を開いてパクパクするだけだ。釣り上げられた海の魚なら切実に何かを語る。だが、人間の開いた口からは無駄な騒音が吐き出されるだけだ。人間がしゃべりちらすことばは、どれ一つとして成就するものはなく、すべてがことば倒れで水の泡だ。自信に満ちた政治家たちのことばも、いかめしいタイトルの論文や書物も、教師たちの講義も学生たちのおしゃべりもそのほとんどは新聞と同様、水に溶けて流れるロールペーパーほどの役にも立たない。大勢の人間のほぼ一樣なことばと声は、私にはほとんど沈黙に等しい。そのような沈黙の支配する社会にあつて生きることは、私には重苦しい。そんな沈黙の圧迫を感じながら人間たちとともにいるのは、たしかに一人でいる以上に重苦しく孤独なものだ。その重苦しさに耐えかねて、人間流の読み方・書き方・聞き方・話し方を学んで彼らと同じようにことばを語ったり書いたりすれば、孤独は一層深まり、苦し

みと味気なさも一層深まる。あそこでは、何を語っても、何を書いても無駄なのだ！ 今夜、雨の音を聴く私は、人間の眼からも人間の口からも人間の耳からも隔てられて、雨の降りしきるこの夜の空間へと、また自分というものの内側へと解き放たれた。私は私の内の内へと、世界はその彼方の彼方へと打ち開かれてゆく。この雨の音を聞いていると私が稀薄になり世界が解体してゆく。私は今も孤独だ。だが存在の胸底からの深い息吹に包まれたこの私の孤独は好ましい。

だが、今、……在ることの幸福を予感するこの私に、語りかける声が聞こえる、……何か奇妙なことばが聞こえる。

人間は死んだ、私を生きよ

エゴを捨てよ、存在を拾え

人間のことばを忘れよ、草木や動物や神の子たちと語り合え

そして、いつの日か

恐るべき洞察の果てに立つて

存在の歌を歌え。

誰……？ この声は誰の声……？ ……私の声ではない。……私を私へとしきりに誘うこの声は誰の声……？ 誰のものなのかわからないこの声（私のものではないこの声）を信頼する私は、夜の空間を落下する一個の雨滴である。……ノアは箱舟を建造したのだ。長さが三百キュビト、幅が五十キュビト、高さが三十キュビトの箱舟を建造したのだ。それは彼が彼の信頼するエホバにそのことを命じられたからだ。私には小舟さえもないが、声が聞こえる。私はこの声を信頼して一個の雨滴となった。私のものではないこの

声への信頼を、私はどこまで生きることが出来るのだろうか。ノアはおそらく何十年にもおよぶ時間を箱舟の建造に費やすという狂気のような信頼を生きた。ノアはその信頼によって洪水を生きのび、水没した者たちには見ることでできない人類の新しい時代を切り拓いたのだった。……今私に聞こえるこの声は、人間の死を告知する。そして人間を生きることのできない私に、その声の主である私を生きよと言う。私とは誰か、あなたは誰なのか、そしてあなたが私に歌えという存在の歌とは何か。私はあなたを信頼する。だが、私に語りかけるこの声への信頼を私はどこまで生きられるのか。私はあなたを信頼する。……私のこの信頼は、私の信頼するあなただけがその深さを測ることができる。……私は、私ではないこの声の主であるあなたに、私の存在を委ねよう。

人間は死んだ、私を生きよ

……

存在の歌を歌え。

意味のさだかでない境へとこの声は私を誘う。私は、意味の網の目から解き放たれて、この声の吸引に身をまかせ、その境へと落ちてゆく。私は今、その境をあこがれて今その境へと歩みゆく。安らぎのなかにあつてその安らぎに護られながら安らぎをもとめつつ歩んでゆく。その歩みは軽い。私とは誰？ 歩みゆくその足は誰の足？ かつて誰かが日々の暮らしのなかで幾度かこのような安らぎの訪れに気づき、その安らぎをむかえ入れたのであろうか……。歩みゆくその誰かの足もとに、安らぎの瞬間の……何と言おうか、思ひ出のようなものがくゆりたつ。私の遠い記憶であらうか。いや、

四

記憶ではない。消えた過去を、今なおそれとつながる幾本かの糸をたよりに今という時間へとたぐり寄せようとするとおぼつかない営みはここにはない。そんな曖昧なものではない。そんないいかげんなものではない。くゆりたちたちこめるこの香りは、おのれ自身と向かい合いおのれ自身と和解しようとする現実がおのれ自身に捧げる宥めの香りである。私は今、降りしきる雨の音や吹く風のなかから呼びかけるあの声に誘われて、私自身が降りしきる雨の一個の雨滴となつて、私の内部に深く穿たれた今という時間のなかを墜落しているのだ。……今、……今の今、……今の今の今、……今の今の今、……私の魂の底の底の……方へと落ちてゆく。私が私自身になりきつて私の影から解放される無数の瞬間から成るこの今という深い井戸のなかに、私である雨滴が落ちてゆく。そしてその雨滴が、私が私自身になりきつて生きる無数の情景を映し出す。それぞれの情景のなかに私は同時に今、溶け込んで、それぞれの情景のなかで同時に今、同じ安らぎを覚える。

魂の暗い空洞のなかを降りしきる無数の雨滴にまじつて私は、一個の雨滴として、今という時間のなかを幸福の予感にふるえながら落ちてゆく、……季節を通り抜け、……歳月を通り抜け、……落ちてゆく。幾滴かの雨滴が、私自身である雨滴と集まつてできた小さな水玉に、今、深い赤や黄に色付いた樹々が映じる。魂の底の方は、遠い秋か。深山の紅葉は今、どこまでも澄みきつた秋の空の下で静かに落葉をとげつつあるところだ。眼球のようなその水玉にはさらに、紅葉の山中を一人黙々と歩いてゆく一人の男の姿が映る。水玉の球面が私が歩いてゆく。さわやかな風に吹かれながら私はときどき歩みを止めて耳をすませる。……聞こえる……落葉するひとひら

ひとひらのかすかな音……谷のむこうから樹々の間を吹き渡ってく
るまた吹き渡ってゆくひとつなりの風のうねり……。……歩きは
じめる。歩いてゆく、歩いてゆく。歩みゆく私の想念やことばが消
えてゆく。私の眼も今はもう何も見てはいない。私の眼は今は、深
山の秋の情景を映すこの透明な水玉だ。在るものと言えば、生命の
美しく華やぐ秋、紅葉の落ち葉を踏みしめ今この山道を一步一步、
歩いてゆくといいこと、靴底に感じられる湿気をふくんだ土、この
身に吹きつけ吹きすぎてゆくひんやりとした風の戯れ、ほのかにた
だよう草木の香り、それに、……いや、語れない、語りきれぬもの
ではない。語ろうとしてことばをつくしても語りつくせるものでは
ない。だが、それほどにも語りたいものが、ほんとうに不思議な
ことだがとても単純なまとまりを成して今のこの私を包み込む。私
もまたその単純なもののなかにすっぽりとおさまりきっている。そ
の単純なものが私に浸透し、私はもう今では包み込まれたりおさ
まったりするものであるというより、その単純なものへと融合して
しまっているのだ。複雑なものであるなら、語ることもできよう。
しかし、こんなにも単純なものは、どうしても語ることができ
ない。実は、複雑なものは単純なものから成りたっているのだから、
複雑なものを語ることも結局は、何も語ってはいないのだ。私
は、今、あの歩みゆく男を球面に反映する単純な水玉である。日の短
くなった秋の山をゆくその男の歩む道も方角も歩調もまちがいはな
い。その歩みはその男を目的地へと連れてゆくことだろう。だが、
歩みゆくその男は、こんなにも深く迷い込んでしまった、……。紅葉
の山の情景の奥深くに、……。秋風のなかに深く、……。歩むというこ
と自体のなかにこんなにも深くその男は踏み込んでしまった。……
知らぬ間に……。帰りようもないほどに深く落ちてしまった、……

溺れてしまった、……。歩むということのなかに、……。水玉の球面を
歩いているうちに。山の秋に無限に溶け入り、秋の山に深く踏み込
んだその男は、今は目的地も到着予定時刻も忘れてただ歩みゆく。
そして今は、その男が落ちた歩むということのなかに、山の秋も秋
の山も没してゆく、落ちてゆく、溺れてゆく。こうして今、誰かの
歩みだけが、……。季節を通り抜け、……。歳月を通り抜け、……。今と
いう時間の底へと、歩みゆく。

気がつけば私は今ここ、湿ったものなら何でも凍結させる厳冬の
深夜、この小さな公園の噴水の傍に来ていた。こんな時間に散策で
はない。私にも意味のわからない歩みが……。知らぬ間に……。私をこ
こに連れてきた。そうだ、私は、私の身中にたぎる熱い想念の吐き
出す蒸気のようなものにせかされて、ここに来たのだ。風はそ
よぎさえもしないが底冷えが迫り、すでに氷結がはじまっている。
噴水を取り囲む小さな池の水が少しずつ厚みを加えようとしてい
る。私の想念の発する激しい熱っぽい蒸気も凍りつく寒気だ。私は
ベンチに腰かける。冷え冷えとした水銀灯の光がこの身に降りかか
る。青味を帯びてきらめくその光は、生きものの吐く息が極度の寒
気にさらされてそのまま一気に氷結した無数の固い氷の粒のよう
だ。氷のように冷え冷えときらめく光が、この生の芯にまでしみこ
み、私は凍える。この寒気は、なまぬるいものたちやなれなれしい
ものたちをそのぶざまな姿のままにすべてすみやかに凍結させる。
この身に充満した私の熱い想念も氷結する。あつてなく氷結する。
あの想念は氷を突き砕く熱い槍ではなかったのか、氷を溶かす熱風
ではなかったのか、……。それがこんなにもあつてなく……。氷結して。

——かけがえのない力としてお前が信頼したことのあるお前の
あの想念は役立たずだ。だが、何も、悲しむことはない。見よ、あ

の情念もまたやはり湿っぽくなまぬるいものであったのだ。嘆くこととはない。完璧なものの中傷者にほかならないなまぬるく中途半端な湿ったものたちを失ったからといって悲しむことはない、嘆くことはない。お前は生きてゐる。すべてが凍結した今、お前のなかには、この凍結させる寒気に触れてはじめてよみがえった思いのするあの大いなる熱がある！—— そうだ、私の生は氷に触れてよみがえる。凍結したこの身のなかにあの大いなる生への愛が息づいているのを、私は聴くことができる。私は、青年らしい私に一人よがりの将来を夢見させ、過去への未練がましい不満を抱かせるあの湿ったなまぬるい情念から解放されて、凍結したこの身の奥の方に、今はじめて身をよじり輝き出ようとするあの大いなる生への愛の活動を感ずることが出来る。この公園に立ちつくす幾本もの樹木が自分の葉をすべて木枯に吹きさらわせて、この寒気にじつと耐えながらあの大いなる生への愛を証するように、凍結したこの身が、その内奥において同じあの愛を証しているのだ。だが途方もなく強靱なその愛を、生の根源を、私はこの手でしかとつかみとることができない。この手の指と同様私の脳髓は厳しい寒気にかじかみ何一つそれをそれとしてつかみとることができない。だから私には、この大いなる生への愛に未来があるのかどうか、この愛が持続するのかわるか、さえ、よくはわからない。寒気に硬直した知性は、分別と化して、この愛について、生のこの根源について、したり顔にいろいろおしゃべりすることであろう。だが愛は、生の根源は、人間の分別の届かぬ彼方に在る。この愛、生のこの根源は、そうだ、この大いなる熱は、熱であるにはちがいない。だが、それは熱いものか、あるいは冷たいものか。いや、どちらでもない。いや、両方である。それは、あの寒気に耐える樹木の証する愛と同じで、意味のさだか

でない境、分別の届かぬ彼方に在る。それは、今この身に降りそそぎこの身にしみこむ水銀灯の光である。冷え冷えときらめくこの光は、やくざな情念にぶざまに膨張した私を凍えさせ、同時にその冷氣によつて私の芯に点火する。私の生を凍結させ、その私の生の芯にあつて輝く。今は、私より、凍結した私なんかより、光が在る。この厳冬の深夜、氷結と闇のなかに輝く透明な光が在る。凍結したこの身の内奥に息づくあの大いなる生への愛は、生の根源のかすかな（だが確かな）このふるえは、この身を凍えさせこの身をよみがえらせる光の波動だ。私は今、この光のなかで安らぐ。この光、闇を透かし見せるとともに闇を駆逐しこうして存在にふたたびその声を得させそのことばを語らせるこの透明な光に射し透されて、私は今、安らかだ。"Veritas norma sui, & falsi est." (Spinoza, Ethica, ordine geometrico demonstrata, Pars II, Propositio XLIII, Scholium) という命題が受肉した安らかな夜。私を駆り立て私をさいなみ私をもてあそぶあの情念を、この光は冷気のなかに葬った。そして私は、その冷気のなかに、そして冷と熱の彼方に、生の根源のよみがえりを、大いなる生への愛がよみがえるのを体験した。私自身は今、光である。存在の芯にまでしみこみ、なまぬるいものや湿ったものをすべて葬り去り、存在の芯にあつて輝く光である。すべてを凍結させる冬の夜に発光する愛である。

あまつちよろいやくざな情熱は切り捨てた。俺の外に俺の生命の発光を認める俺は、今、真夏の炎天下で土管工事に精出す。照りつけるおてんとう様にや文句はねえ。おてんとう様がなきや俺たちや生きてゆけねえんだ。日差し強烈なこんな日中は長袖のシャツを着て首にはタオルを巻いて自分の身を護りやいいのさ。こんな日差しに首や肩なんかじりじり焼かれた日にや、その後二、三日仕事に

ならねえ。額には鉢巻をしめて、汗が目に入らねえようにして、よし、仕事だ！もう若くないこの身にや昨日や一昨日の、いやもつとだ、真面目に働くようになってかれ十五年、その疲労を残したままで、今日の仕事だ。クソツタレ！体も気持ちとおんなじでいたわつてばかりいると弱くなるからついても気合いを入れて仕事を始めるんだが、いたわりすぎるってことがどんなことだったか俺はとんと覚えがない。とにかく仕事を始めて二時間もすりゃ、いくら気合いを入れたって体は使いすぎりゃすりきれるってえことが身にしみてわかつてくらあな。女房がこの前言つてたな。酒だつて度をすごすことはなくなつたし夜ふかしするわけでもないのに一週間仕事して休みの日には夕方近くまでぐっすり眠つて俺を見るとかわいそうになつてくる、って。俺もそろそろ潮どきつてことかな。ツッパリきれねえ歳になつたかな。へッ、悲しくなるぜ。……さあ、あと三十分がんばれば、日陰でねそべつて涼しい風に吹かれない……などと考えてると、何だ、俺はいつもの歌を口ずさんでいるじゃないか。この歌を口ずさむと、そのときだけでも、仕事仲間のことや稼ぎのことを考えずに済む。不満や仕事の辛さでも、人から少しは気がそれる。辛かろうがどうだろうがやらなきゃならんことはやるしかないし、この仕事は辛いものと昔から決まつてゐる。いつのまにやら癖になつたこの歌が俺の、ど、を通つて出てくる。すぐ横で作業してる奴が、今日は暑いいう、と言うもんだから、俺も、おお、暑いいう、と返事するが、今日の日差しはそれほどでもないぜ。今気づいたこの歌、俺が口ずさむっていうより、俺の知らない間に誰か歌うともなく俺の口から出てくるこの歌を聴いていると、ギラギラの日差しや、アスファルトの破片まじりの土砂をすくうこのスコップを握る手のだるさや、あちこちがたのきた俺の体の痛み

や、路上の熱をたつぷりふくんで俺らの顔に吹きつけてきやがる熱風やなんかが、いくらか和らいでくる。固さ、辛さ、熱さ、きつさ、だるさ、痛さを、この歌が和らげてくれる。俺はぼんやりとした意識のなかで、どこからともなく湧き上がるこの歌に耳を傾けながら、チクシヨ、このクソツタレメ、と、固さや辛さや熱さやなんかに悪態ついて気合いを入れなおす。悪態をついていられるなら、俺もまだ当分は、この一、二年は大丈夫なんだろう。ありがたいことだ。……それにしても、今日はやけに体に熱がこもりやがる。こもつた熱があおつてきやがる。チクシヨ、歌でも歌うか、……何て歌詞だったか……歌詞が思い出せない、……ああ、何てことだ、……メロディーも思い出せない……何か変だぞ、……ちよつと今日はやられたかな、大丈夫かよ、……。いや大丈夫だ。……あつ、あの歌だ、……あの歌が聞こえてくる、……誰だ……歌っているのは、……どうしても歌詞が聞きとれない、ことばがわからない、……メロディーもわからない、……だけど、たしかにあの歌だ、……俺に聞こえるのは何か単調なしつかりしたあのリズムだけだ。……俺も何だかたよりねえな、でも身は軽い、大丈夫さ、スコップを握る手に力が入らねえが、そらつ、見てみるってんだ、ちゃんと仕事ははかどるぞ、ベテランだもんな、……だけど何かおかしい、頭がボーとして無重力状態みたいだ、……どこかにゆっくり落ちてくみたいだ、……やつぱり何だかたよりねえ、……あの歌のリズムはしつかりしてる……ターン・ターン・ターン・ターン、単調だがしつかりしてる。……あれえ、これは……何あんだ、思い出したぞ、この歌は、俺の心臓の鼓動じゃないか……俺の体中にひびきわたる俺の生命のリズムじゃないか……俺の体の内と外を往復して俺を養う俺の息のリズムじゃないか、……この歌は俺の存在じゃないか、……そうだった

たのか、……それにしてもこんなに自分の存在をまじかに感じたことなんか今までなかったなあ……いいものだ、これは。……疲れた。……暑い。この歌は、暑さに疲れた俺をしゃんとさせる冷たい井戸水みたいだ。この歌に聞き入る今の俺は、冷たい雨にでも打たれていたいみたいで気持ちいい。俺は安らかに今、どこかへ、ゆつくりと、落ちてゆく、……今、……今の今、……今の今の今、……のなかに……。雨滴が一個、きらめきながら、深い井戸のなかに落ちてゆく……。

疲れ切ったこの身を横たえて、降りしきるこんな雨の音を聞いていると、……私自身が名もない一個の雨滴と化して、今という時間の奥底に落ちてゆく。私を生きよ、と言う声が、私を誘う。私は歩みゆく、……落ちてゆく。その声の誘う境、その境を遠巻きに見守るだけで決してそこに足を踏み入れようとならない者たちが異界と呼ぶ異言を語る異形の者たちの住む境を落ちてゆく……。私は、今、同時に、すさまじい紅葉の深山を歩みゆく者であるし、ひとけのない深夜の公園で冬の寒気にその身をさらす苦行者であり、炎天下で歌を口ずさみつつその歌に聞き入りながら穴掘り仕事に励む中年の老夫である。さらにまた、今という時間の深みに生息する無数の生きものである。特定の誰かであることをやめた私は、誰でもない者となつてまた誰もがそれであるその者となつて、落ちるという単純な行為、歩みゆくという単純な行為のなかで輝かしい自由を享受する。それは、一つの行為に没入する者の自由であり、単純なものに溶け込んだ者の自由である。またそれは、多様な選択肢のなかから一つの行為を選ぶ選択の自由（という名の不自由）から解き放たれた自由である。あの私ではない誰かの声を信頼しきつて歩みゆくと

きの自由である。それは、その行為のなされない可能性についての一切の思惑から解放される自由であり、選択主体から解放される自由である。選択主体などがあるところには、完全な自由、今という時間の開く自由は成立しない。行為の目的と方向をさだめる私という選択主体があれば、私の行為は今という時間に所属するという現実からそれはじめ、私と行為と目的の分離がはじまる。私がその行為を評価したり意味付けしたりして私の支配下に置こうとすればするほど、私と行為と目的は、ますますバラバラになつてゆく。知ること見ること聞くこと触れること為すこと……が合一して純粋な行為となつた今という時間のなかを、私は、季節を通り抜け、歳月を通り抜け、落ちてゆく、……歩みゆく。あるいは私は、天界の彼方にまで踊り越えてゆく舞踏の名医であるのだろうか……。特定の私が生の安らぎを探りあてると、同時に私の存在を限界づける境界の彼方が開かれ、その彼方を私が同じように安らかに歩いている。……歩行者と一つになつた歩行や、凍結した冬の夜の発光や、確かなリズムを刻む歌や、エゴを洗い流す雨音は、……今、……今の今、……無数の今が同時に垂直に重なり融合する一つの今にあつて、無限に自由である。またそれらは、無数のそれらは、それぞれがすべて、何らかの想念や思惑や目的や目的を実現するための手段や計画や予定表や記憶や経験にとらわれることなく、何ものにも執着することなく、自由である。私が歩みゆく今という時間は、純粋な活動の場であつて、何か特定の想念・思惑・目的・等のもとにとどまることはない。だから、ことごとく我執の表現である人間のことにばには、それを捉えることはできない。私の歩みゆく今という時間は深い。人間の語るどんなことばよりも深い。この時間の奥深くに歩みゆく生は、純粋な活動のなかにあつて安らぐ。人間のことばから解

き放たれてこの活動そのもののなかに踏みとどまるこの生は、時空に引き裂かれることもなく、それゆえまた、時空に引き裂かれた者たちのように時空を操作しようとすることもなく時空を横断しようとするということもなく、安らかだ。だが、純粹活動として存在し純粹活動を生きるこの生に、余暇はない。余暇があるということは不自由であるということだ。行為と行為の目的と行為する者が分離し、知ることと見ることに触れることを為すこと……が分離し、今という時間に所属するという現実から、それらがそれであるときにしか余暇はない。……今という時間に住む純粹活動は、私のまわりを、私の傍を、私の内部を、つまり私の内部にほかならない私のまわりや私という私の彼方を貫流し、生ける宇宙を造型する。その活動は、今、私のすみずみにまで浸透し、私を無数の活発な粒子に、水の粒子、風の粒子、光の粒子に変容させる。純粹活動のなかにあって安らぐ粒子、……あるいは波動と言おうか……波動、しかも媒体なくしてどこからともなく突如出現し、今、在り、今の今、今の今の今、……垂直に重なる無数の今の深みへと（どこにゆきつくのだろうか）無限に伝播する波動、それ自身が波動の媒体でもある不思議な波動へと、私を変容させる。広々と開けた空間にたおやかに波打つ山波よりもはるかに巨大で、海の波よりもはるかに柔軟で、うねる大気の波である風よりもはるかに繊細で、微細な光の波よりもはるかに精妙な、不可思議な波動と化した私にとって、超越とか越境ということばはもう意味がない。降りしきる雨の音に私が溶けてしまった今、そしてその今と同時の今の今、……超越とか越境などということばは意味がない。異界に降り立つた者にとって異界ということばが意味を失うように、あらゆる境界を踊り越えた者に、超越とか越境ということばは意味がない。水であり風であり光であり歌である

私にはもう、それをめざして超越すべき理念も目的もないし、越えるべき限界も、何かを越えるべきだと命じる課題も義務も見えないのだ。限界が見えるとたちまちにして私はその彼方に踊り越えている私を見るのだから。この今という時間において、私も歌も光も風も水も熱気も寒気も、なぜか、単純なものへと合一して、境界も限界も消失し、私にはもう、理念も目的も課題も義務もない。理念、目的、課題、義務などというものは、今という時間との和解を拒み、何かに執着してあくせく努力するという人間に特有のぎこちない活動（衰弱した活動）を生ぜしめたただけだ。こんな活動は決して完璧なものとして成就することはなかった。完璧な活動とは、灰を残すことも煙を立てることもなく燃える炎のことであり、無数の粒子がそれぞれそれ自身であることをやめて単純なものへと融合することであり、単純なものへと自己を開け渡すことであるからだ。こんなただただしい私のことばがすでに灰であり煙でありかすでありくずであるのだ。単純なものはすべて、ありとあらゆる種類の境界・限界の彼方に在る。分別や人間のことばの彼方に在る。その単純なものとその単純なものに至りつこうとする努力との間には、この努力だけでは絶対に埋めることのできない差異がある。人間のことばにかたどられた努力、すなわち灰や煙や燃えかすでは決して埋めることのできない差異がある。およそ境界と限界とは、経済性を追求する人間のことで分別がこしらえあげたかりそめの理念であるにすぎない。それゆえ、超越も越境も、境界と限界をこしらえる人間のことばと分別の力を前提した活動であるのだ。だが今、人間のことばが解体し、分別の彼方に存在の声が鳴りひびくなら、もう超越も越境も意味がない。……身を横たえて眠りに落ちてゆく私がこんなことを考えるときもなく考えていると、この考える私に、私のこ

の今という時間の底から、私のものではないあの声が、私にはつきりと語りかける。眠りがかなえてくれるのと同じくらい確かな安らぎに包まれながら、私はその声に聞き入る。

不可思議な波動であると自認するお前よ、お前は、今という時間を旅するお前自身がどこから来てどこにゆくのかわからないと言う。不可思議とかわからないとか、……お前は、今だに、思議とかわかるとかにこだわりつづけている。そのようなこだわりは、今という時間を旅する者にはふさわしくないということとを、お前はすでに知っているはずだ。思議とか不思議とかわかるとかわからないとかにこだわるお前は、まだ十分に深くはない。お前は、私がお前に穿った今という時間の穴のなかにまだ十分深く降りてはいない。お前は私のことばを十分深く掘り下げてはいない。それなのに、お前は、詩人たちのように、自分の水に泥をまぜてその底が見透せないようにしてその水がさも深いものであるかのように見せかけている。今という時間の奥底に達したかのようにお前は不思議とか分別の彼方とか単純なものとか言う。だが、今を降りてゆくお前の旅はまだ浅い。お前に存在のことばを聞く耳があり、存在の声を聞く思考があるなら、お前がたしかに受け取ったこの今という時間を、その奥底に至るまで究めよ。その探究の旅は、お前が旅するこの今という時間そのものが導いてくれることだろう。

私に語りかける声の主であるあなたよ。私は私の水に泥をまぜたりはしていません。私の口は、存在のことばを私の耳が聞いたままに語っているにすぎません。誓って私は、泥をまぜたり

はしていません。

お前の言い分はわかった。お前の心持ちとしてはそう言いたいところだろう。誓って、とお前が、ほかならぬお前が、この私に忠実であろうとするお前が言うのは、もつともだ。だが、私を生きようとするお前は何に誓ってそう言うのか。今という時間に誓ってと言えるほどにお前は今という時間を知ってはいない。お前が誓いを立てるときお前は今だにお前の魂のなかに人間のことはへの信頼を残している。人間の背骨の末端には猿の尻尾の骨がいくつに残っていたが、お前の口にはそれ以上にまだ人間のことはが残っている。そしてその人間のことは泥なのだ。今という時間は、人間のことは全的な否定に成立する透明な水玉のようなものだ。だがお前の思考とことばは、その水玉のように透明であろうか。現実そのものにほかならぬ知の光をその現実に得させる鏡ほどに平らで澄みきっているであろうか。お前の思考とことばに歪みとくもりはないであろうか。お前の誓いは、私の耳にはまだ空しいものに聞こえる。その空しい誓いを何か充実したものであるかのようにお前が語るの

は、お前自身がまだ、あまりにも人間的であるからだ。……それでも、私には、私に忠実であろうとするお前の存在のベクトルが好ましい。だから私は、私に好ましいお前に、わかるように話そう。人間のことはとそこばにかたどられたすべての人間の活動の全的な否定である今という時間は、お前がお前自身の眼であることをお前の眼で見たあの透明な水玉に似ている。水玉が華やぐ秋の情景をその球面におさめるように、今という時間はすべての存在をそのすみずみに至るまであます

ことなく完璧におのれのうちに包括しているのだ。今という時間は、この巨大な宇宙の生誕からその終末に至るまでの存在の海を抱えている。今とは、ありとあらゆる存在がひしめき合って形成する一つの単純な現実である。その今とは、宇宙の生の強烈なエネルギーが集結し放射される破壊と創造の現場なのだ。無数の世界がその場に創造されてはその場に帰滅する。今とは、この創造と帰滅の活動であり、現実であり、すべての存在の息である。そうだ、お前は、その息にすでに触れ、その息を聞き、その息を知っているはずだ。お前が、疲れ切ったお前の身を横たえて、お前の人間的な活動から遠ざかり無為の境に浮遊したとき、お前は、私が穿った今という時間の穴を墜落しながら、雨滴となり、水玉となり、紅葉の深山を歩む歩みとなり、光となり、歌となった。お前はそのとき、今という時間にみなぎるエネルギーの遊戯のままに死と誕生をくりかえしたのだ。しかしお前はその生を、死と誕生の遊戯をまだ十分には体験していない。私は、お前の水はまだ浅いと言う。それはお前がまだ、今だに、あまりにも人間的であるからだ。お前の口は、そしてお前の脳髓は、まだ人間のことばに依存している。この単純な現実を語るお前の口に、あの崩壊し残骸と化した人間のことばがしのびこんでいる。存在の声の器であるお前よ、お前は、お前の魂を、ごみためにしてはならない！ 今という時間の井戸に降りる者は多い。だが、それをその奥底に至るまで究める者は稀だ。お前はその稀な者となるかもしれない。たいていの者たちは、この帰滅と創造、造型と破壊のエネルギーのみちあふれる現場を垣間見て、恐怖に足がすくむ。魂が、存在が、恐怖にすくむ。そして今という時間を、恐怖に捉えられた者に

特有のさまざまな様式のもとに解釈しようとするのだ。おのれの信念や空想や要求や経験や知識などといった、これら人間のことばにかたどられたものたちとの折り合いがつくようにと解釈しようとするのだ。こうして、さらに、今という時間を手なずけ、この単純な現実を人間のことばの支配下におさめ、そこにあふれるエネルギーを思いのままに方向づけ利用することを企てるのだ。この営み、あまりにも人間的なこの営みは、おのれを圧倒する強大なエネルギーを前にしての恐怖に由来する。恐怖のさまざまな形式である憎悪、敵意、闘争心、羨望、嫉妬、不安、焦燥が、存在の声のひびきわたる至福の今をねじ曲げ、歪め、不具にし、退却させようとして絶望的な努力を払っている。だが、人間にして今という時間にみなぎりあふれるエネルギーを自分の都合に合わせてさばくことのできる者など誰もいない。不可能なことの成就をめざす絶望的な努力、この狂気と愚直が、すべての人間的な営みの根柢である。恐怖に駆られた人間が、人間のことばでおのれの安全を確保しようという見当ちがいをやらかしているのだ。恐怖にすくむ足で、恐怖に凍りついた心臓で、凍える脳髓と指で、安全を確保しようとしているのだ。この見当ちがいのもとに、僧侶と教団が生まれ、将軍と軍隊が生まれ、政治家と党派が生まれ、愛国者（国民）と国家が生まれ、詩人と無用者が生まれ、学者と学生が生まれ、エゴイストと市民社会が生まれる。彼らはみな、人間のことばを用いて今という時間からそのエネルギーをくすねとる泥棒である。恐怖に駆られ安全をもとめる我執が知性を屈服させるとき、知性は安らぎを失い断片化する。だが、今という時間にあふれるエネルギーを自分の都合に合わせてさばき利用しようとする

人間的な活動には、悲哀がある。恐怖に由来するその活動、決して完璧なものとして成就することのないその活動には、悲哀がある。ここには争いがあり勝利と敗北がありその勝利をも飲み込む衰弱と死がある。泥棒たちはその生命をもつておのれの活動を償っているのだ。それゆえ、私の眼には、彼らのうちもつとも輝かしい勝利を享受している者も、すでに死んでいる。人間のことは捨て、おのれを捨てることのできる者は幸いである。今というこの時間にあふれるエネルギーの遊戯のままに遊動するという純粹活動のなかに安らぎを探しあてることのできる者は幸いである。この今を前にして足がすくみ、この今という時間からエネルギーを盗みながらおのれの安全安泰を確保しようとする努力は痛ましい。その努力は、不当な観念と欺瞞と競争と戦争を育む土壌であり、人間と人間との間に果てしなく続く争いの原因であり、人間の生の悲慘の原因である。しかし、私に好ましいお前よ、お前は、今という時間にひびきわたる存在の声に聞き入れ。存在のことばをそこなく存在の語るがままに聞き取れ。お前の活動を、お前の生を、お前の存在を、今というこの単純な現実に帰滅させよ。お前は自由になり、お前は花開き、この強烈なエネルギーと一つになる。そこには争いも悲哀もなく、はじまりもおわりもない大いなる生がある。それは愛であり破壊であり創造であり、至福である。……とはいえ、今をゆくお前の旅はまだ端緒に似たばかりだ。……私の言うことをよく聞け。私が今という時間に似ていると言うあの透明な水玉のことをよく考えよ。お前は、あの小さな水玉の球面に映る存在だけでも、まだ究めつくしてはいない。お前の水から泥を取り除き、あの紅葉の深山を映す水玉のよう

に透明であれ。そうすればお前は、あの小さな水玉に映るすべての存在を究め、あの水玉がお前の見たことのある空のどんな深さよりも無限に深いことを思い知ることであろう。……お前はまた、お前の今を、たどたどしく、円環を成すものとして語った。降りしきる今夜の雨が今という時間に包括された宇宙をひとめぐりして同時に今ふたたび降っているのだとお前は言う。そのときお前は、お前とお前以外のものたちとが相互に浸透し合う円環とすでにお前自身であるお前の外なるものたちが相互に浸透し合う円環を、たどたどしく語った。そのお前の舌つ足らずなことばは、雨や水玉や歩くことや風や光や歌がお前の耳にささやいたことばの反響をとどめるかぎりはい。幼子のような、あるいは人間のことばを忘れた老人のようなお前の語りのたどたどしさこそが、雨や風や光のことばのなめらかさであり、人間にはおよびがたい存在のことばのたくみさであるからだ。しかし、お前には、しばしば、今という時間にひしめく存在たちの循環を人間の耳にたくみに語りたいと思うときがあるようだ。存在の海の深さの測りがたさを知りながら、そのときお前は、自分でも気づかぬままに人間であることを執着し、人間の境位に安住しようとしているのだ。そのときお前は、存在がお前に語りかけたことばを、その根であり父であり母である存在から断ち、盗み、人間のことばの目録に登録しようとしている。窃盗と剽窃が、人間のブンカ・ブンメイのはじめにある。だがそのときお前は、私の言う真理への道を踏みはずしはじめているのだ。お前はそのとき、真理に護られながら真理をもとめつつ真理への道を歩んでゆくことをやめ、その道からそれてゆこうとしているのだ。それでゆくお前に私は語ろう。私の声

を聞け！ お前はお前自身に背を向けてお前自身の影をとびこし、お前の今の光のなかに立ち返れ。お前のことばが、お前の思考が、純粹な活動にして行為にして生にほかならないお前の今をおおう影とならないように！……もう一つお前に言っておこうか。お前はたしかに、存在からの語りかけに応答しているが、その応答は、存在からの語りかけにたいする応答としてはまだあまりにも貧弱である。お前の語る円環は、はるかに広大なものであるはずだ。すべての存在の自己回帰を語ることばは、それ自身がはるかに広大な円環を成しているはずだ。しかしまた同時に、お前の語る円環は、はるかに微細なものにまで、光の粒子よりも無限に微細なものにまでおよぶものであるはずだ。今という時間には、人間が小さなものとみなすウィールスや原子さえも、それを見て巨大な一つの星雲のようだと言語極微の存在たちが生きているからだ。この今という時間には、至るところに円環がある。至るところに破壊と創造がある。お前は、その円環をあまりにも人間的に語った。無限大なるものと無限小なるものとを不可思議な秘義と思ひ定め、中間的なもの、人間の眼が見るにでころなものだけに注目した。人間に固有のその遠近法は、存在の微分法と存在の積分法を知らぬ人間の間では、中庸の道と呼ばれることがある。しかし、お前も知っているように、中庸などと言っても所詮は凡庸ということなのだ。無限大と無限小を究めぬ者には決して中庸を究めることはできない。私の子よ、二つの無限を究め、二つの無限の合致するところに中庸をもとめよ。

……と、このように、

声なき声が私に言う。眠りに落ちてゆく私は、その声を聞いて覚醒し、私ではないその声の主に返答する。

あなたの言われることがわかります。やはり私はまだ浅い。究めつくしてはいない。私の井戸の底まで降りてはいない。私は、ことばを深く掘り下げてはいない。私のことばは、あの湿っぽい熱した情念のようにやくざものだ。そのことを容赦なく暴きたてるあなたの声は私の情念を凍結させる。だが、私は生きています。私は、この今という時間、この単純な現実のなかに踏みとどまっているのではないか……。私は、あなたに聞きたいことがある。どうか答えてほしい。あなたの言うように私がさらにこの今という時間の深みに垂直に降りていったとして、私は果たして、その底に、底の底の究極の奥底に達することができのらうか……。

私に聞きたいというお前にむしろ私がたずねよう。今という時間の奥底に達することができるかどうかは果たして今ほんとうに重大な問題であるだろうか……。よく考えてみるがいい……。降りゆくことがお前の生ではないのか、……。この今を完璧なものとしてお前がほんとうにこの今に帰依するなら、その完璧な今を究めつくすことのほかにお前の生があるのだろうか……。お前がこの単純な現実を完璧なものと考えたら、お前は、この単純な現実がお前の旅を完璧に導いてくれることを信頼するだろう。もうお前は、不可思議だのわからないだのわかるだの、人間や浅瀬に住む魚のいいぐさはやめよ。お前がほんとうに自由な水中を遊泳するイルカであるならイルカらしく存在の海の

深みを究めつくせ。

この今という時間は完璧なものであると私は思う。そして、私は知っています。今という時間の海の、私の知らないその深みに、日光を知らない孤独な深海魚が隠れていること、を。私はまだ私の魂の深みに泳ぐ眼のない魚を釣り上げてはいません。私の獲物は浅場の魚ばかりです。私はまだ深い孤独に触れてはいません。しかし私には、その孤独の鏡となる思考とことばがありません。

人間の思考やことばはもう役に立たない。だが、降りてゆく私の歩みを導く先導の星が私には見えない。人間たちのもとに帰る気のない私は、こんなところでさまよいつづけるのだろうか……。私は、まよってしまったのだろうか、……。こんな浅場で……。だが、あの声なき声がふたたび私に語りかける。

……思考がない、ことばがない、深海魚を釣り上げる釣り糸がない、とお前は言うのか。信頼することに浅いお前よ、おのれを捨てることに非力なお前よ、お前は、この単純な現実、今というこの時間から、それと気づくこともないままに遠ざかろうとしている。その言い訳として、思考がない、ことばがない、とお前は言う。お前は知らなければならぬ、お前に思考が欠け、ことばが欠けているのは、お前が降りてゆくことをためらっているからだということを。私の穿った穴のなかに飲み飲んでとびこんだお前、凄絶なエネルギーの遊戯を前にしてもひるむことなくたじろぐことなく穴のなかにとびこみ、落ちることに

なりきり歩むことになりきったお前は、今、落ちることを、降りゆくことを、歩みゆくことを拒もうとしている。純粹活動の遊戯に、それと気づくこともないままに今お前は抵抗しようとしている。ここでは、歩みゆくことをやめた者には風は吹かない。今という時間を完璧なものと信頼したお前は、その導きの完璧さを信頼できないのだろうか……。思考がない、ことばがない、先導の星が見えないと嘆くのは、お前がお前の自由の根源であり、お前の生と存在と安らぎと活動の根源であるとして信頼し飲みむかえいれたこの今という時間に不平を言うことではないだろうか……。こうしてお前は、風に見捨てられブネウマに見捨てられ、存在のことばに見捨てられようとしている。お前はお前の存在から見捨てられお前の影として在りたいと言うのか……。私の子よ、私のことばを聞け。濃い闇がお前の鼻先まで迫っている。お前はその闇をお前の聴覚と触覚と嗅覚をもって直視せよ。おのれの歩みを導く先導の星が見えないのなら、おのれの視覚にたよることをやめ、動物たちのように、いや、あの盲目の人たちの模範にならって耳と皮膚と鼻で視ることを学べ。この闇のなかにあって今なお、さまざまに存在たちがお前の耳や皮膚や鼻にことばを届けつづけている。すべてをおのれのもとにたくり寄せ表層化し平板化し釣り上げようとする人間のことにばに深く侵入された視覚を捨てて、耳と皮膚と鼻にたよるがいい。お前は言う、私は水の粒子だ、風の粒子だ、光の粒子だ、と。そうだ、そのとおりだ。それこそ、私の子であるお前にふさわしい洞察だ。だがお前は、その洞察からの無数の帰結を、お前の聴覚と嗅覚と触覚で確かめたであろうか、……。また、水と風と光がお前に授けたその洞察を語ると

き、お前は、彼らが語るがままのことばを語っているだろうか、……水や風や光と一つになつてもはや超越も越境も異界もありえない境に至りついたとうそぶくお前は、十分に誠実であろうか、……お前のことばにはたしかに存在のことばの痕跡が認められる。だがお前は、人間のことばにかたどられたお前の視覚が闇におおわれたとき、歩みゆくことをやめ、そして今、何かあまりにも人間的な想念に執着しようとしているのではないだろうか。それではまるで、この単純な現実を恐怖しこの現実の背を向け過去や未来の方にその魂を売り払ったあの人間たち、滅び去ったあの人間たちのようだ。幾重にもはりめぐらした人間のことばの城壁のうちにおのれを幽閉したまま息絶えたあの人間たちのようだ。お前は、お前自身のことを、一片のボードと寄せる波に身を託し海面を滑る少年であると言う、また、ラフティングに興じる少女であると言う。それならお前は知っているはずだ、——波におのれを開け渡す者こそ波をよく御する者であり、流れに身を委ねる者こそ流れをよく制する者であることを。降りてゆくがいい、降りてゆくお前をむかえようと待ち構えている存在たちのもとへ！

……と、
声なき声が私に言う。その声は私の魂である私のこの身にしみとおる。私は私の魂の奥に、この身の芯に、少しずつ明るさを増すきらめくものを確かめながら、返答する。

そのとおりです。あなたの言うように、恐るべきこの虚空は、そこに私が落ち、歩んでいったときに、それ自身、おのれが充

実した現実であることを明らかに証しました。そして、存在たちの声をまだ人間の聞いたことのない楽音として保持するこの現実の自己証明を、私は語りたいたったのです。そのとき私は、この今という時間にたぎるエネルギーに恐怖したのか、人間のことばへの郷愁に捉えられたのか、存在たちの語ることばを語りたいたったのか、あるいはその欲望に執着したのか、あるいはそのすべてなのか、よくはわからぬままに、この存在の海の波間を木切れかボロ布のようにただよう人間のことばの残骸に手をのばしたのです。そしてこの手がその残骸に触れたとき私は発狂したのです。その後の一部始終はあなたの御覧になったとおりです。狂気にとらえられた私は、人間のことばの残骸を手に握ったまま眠り夢を見ました。私自身がすべての境界の彼方に立った夢をみたのです。しかし今、私にはなおも超越が越境が墜落が歩みゆきが課せられていることを私は知りました。まだ落ちたことのない深みにまで私は落ちてゆかなければなりません。いや、私には課せられた義務などありません。降りてゆけというあなたの声が私に落ちることをあこがれさせるのです。私は超越と墜落を意欲します。私はまだ、この今という時間の奥底に眠る宝を探りあててはいません。私が見つけたものと言えは、水神や風神や雷神といった浅場に住む鰯の頭のごとき神々だけです。私が探ったのは、広大な奥行をもつ今というこの時間の一画だけです。——ああ、この今という井戸には私がまだ降りたことのない深みがある。凡人や狂人や夢見る者がうわごと語る浅薄なことばなどにまったく関心を示さずにおのれのことばを語りつづける存在たちがいる。存在のことばがぎつしりと詰まったこの深みが、私にむかつて開かれている。

私は、人間の魂を深く耕すということに、いやそれ以前におのれの魂の底深くへと降りてゆくことに無関心なあのカスのような教師たちと似ているのだろうか。これは恥辱である。苦痛や恐怖になら耐えもしよう。だがこの恥辱に耐えることはできない。だが、私がおこなったことは、人類の船を導くあのパイロットたち、啓蒙家とか教育者とか呼ばれる者らがやったことと大差ない！ 人間への愛に満ちあふれ人類の将来の夢を信じた善良な、ほんとうに善良な教育者や偉大な啓蒙家たちは、この今という時間の深みに測鉛をおろした。船の安全航行が最重要の課題であるあのパイロットたちは、船が難所にさしかかると、昼も夜も、一刻も気を抜くことなしに、船の進路に十分な水深があるかどうかを確かめたのだった。そして彼らは、一定の深さ以上の水深を確認すれば、航行を安全と判断したのだ。だが彼らは、決して、測り綱の先端のさらにその下方に広がる深みにまで知の触手をのばそうとはしなかった。彼らもまた測り綱という人間のことばの断片で水の深さを測り知る者たちであるが、その知は、その知を超越する広大な奥行をもつ底知れぬ淵を、不可思議とか分別の届かぬ彼方とか名づけるだけだ。そして私もまた底知れぬ深みを前にして同じことを言う。……しかしそれでも私は彼らとはちがう。あの難破した人類の船のパイロットたちは存在の海の深みによりも、その表層に、表層に浮く船に心を奪われていた。私もまた知において、彼らと同様に浅い。だがそれは私がこの浅場に住む魚たちと戯れていたからだ。水神や風神や雷神という名の楽しい魚たちとの戯れに夢中になって、私も、さらに下方に住む存在たちのことを忘れるところだった……。

……と、このように、私は、あの声の語りかけることばを反芻しながら考えた。する

とふたたびあの声が言う。

私に、好ましい、私の子よ！ お前は私に忠実だ。お前の浅さとお前の水の濁りとお前のことばの貧しさを語る私のことばをお前はよく聞き入れることができた。これでやっと、深みへと踏み込む準備ができたというものだ。お前はもうこれからは、真理に護られながら真理への道を歩むために、ただ、光の方に顔を向ける花のような性質をもっていさえすれば十分だ。それがあればお前は、おのずと今という時間のなかにとどまり、この井戸の奥深くへと降りてゆくことであろう。今という時間を究めようとするなら、存在たちのことばをつじつまのあつたことばや思考へと変換したくなる誘惑は退けよ。この単純な現実の脈動にお前の存在が調和すれば、お前は、分別が活動するさいにその手がかりとして用いるさまざまな区別が、その区別の背景にあつてその区別を可能にする同一者のなかに溶け込んでゆくことを知るであろう。これはすでにお前もいくらか体験済みのことだ。そして今また体験しようとしていることだ。お前のその知がさらに透徹したものになるに依じて、その知は、その知自身によつて出現する知であることが明らかになるだろう。お前は変容し、もはやその知の所有者ではないだろう。存在の声を聴こうと企てたり努めたりするお前のエゴやお前のなかの人間は、企てや努力の観念とともに消滅するだろう。そしてお前はお前がゆこうとしているこの今という時間のなかで、ここにお前を創造しお前を滅ぼしふたたびお前を創造する純粹活動と一つになり、お前の生の根源と一つになるだろう。……さあ、湧き上がることばに耳を傾けるがいい。闇のなかへと手をのば

すがいい、……お前が恋慕し聞きたいと願ひ触れたいと願うことばたちが、存在たちが、お前を恋慕しお前をむかえいれようとしているではないか。お前にむかつてざわめき語り出しているではないか。さあ、お前を飲み込もうとしてお前にむかつて開かれたこの存在の海のなかに降りてゆくがいい、……その歩みを、お前の一步一步をむかえいれる存在たちの祝福のことは確かめながら降りてゆくがいい。草木が芽を出し花を咲かせ実を結ぶように、存在の叡知の招きのままに歩みゆくがいい。そして、その歩みの果てに、お前は、自己自身と向かい合う現実となるがいい。お前は、いつの日か、お前を飲み込むこの存在の海を飲み干す井戸になるのだ。その途上でお前は神々や精霊や怪物やその他さまざまな力あるものどもと出会うことだろう。彼らとかかわるお前は、玩具で遊ぶ子供のようであれ。だが、あまり戯れすぎないように。彼らのなかにもまた輝かしい光をその身に帯びたものが多い。だが彼らには彼らの居場所がある。そして居場所のあるものたちはすべてまだ十分に深くはない。超越と墜落を意欲するお前から見れば、彼らもまた浅い存在でありなまぬるい存在であるだろう。お前は、お前の居場所を究める旅をゆく。子供が、青年が、壮年や老境の者たちがそれぞれ成育の道をゆくように、お前も旅をゆく。現実がおのれ自身へと折れ曲がるところ、そこがお前の究極の安らぎの場となることであろう。それへの道を、今、お前はゆく、……今の今、……今の今の今、……という道筋をお前はゆく。その道のつきるところ、そこがお前の安らぎの場だ。そこに至りつくまでは、お前の今は、お前の現在は、不在の今であり不在の現在であるだろう。そして、お前という存在も、そのときまでは、

不在の存在であるだろう。さあ、降りてゆくがいい、……歩みゆくがいい、……生きるがいい、……存在の証を立てるがいい。